織姫山の麓（ふもと）から

法玄寺報
第35号
平成30年秋

特集　能（のう）の夕（ゆう）べを開催

毎年、千灯供養と百万遍修行の後にコンサートを行ってきました。既にお知らせしましたように、今年は趣向を代えて能の夕べを行いました。境内は300本のローソクに照らし出され、薪能のような幽玄な雰囲気に包まれました。檀家の方々だけでなく、足利灯り物語に参加した人達も加わったため、本堂は満員になりました。

能楽師の和久荘太郎さんは東京芸術大学の邦楽科で宝生流を学びました。その後、宝生流の宗家の許可を得て独立し、現在では涌宝会（ゆうほうかい）を設立して、全国で公演を行っています。今回は、笛方と太鼓方を連れた3人による能の夕べを行いました。

まず和久さん3人は内陣前に置いた屏風の前に現れ、能で最も有名な羽衣を舞いました。その後、参加した方々とともに羽衣を一節ごとに謡いました。能の夕べなので、単に出演者が演奏し、舞うだけでなく、参加した方々と一緒に能の謡を行い、能の説明を随所で行いました。また笛方や太鼓方のソロ演奏もあり、それぞれの楽器の説明もありました。

最後の舞の前には、劇場で幕を上げるように屏風を両側に引き、内陣を見えるようにしました。もともと能は、住職の話す法話を一般民衆にも分かる形で行われた寸劇が起源です。能の美は「花」と言われますが、やがて散りゆく花はそのまま仏教の無常観を表すものです。そのため屏風を横に引き、内陣を見せて本尊である阿弥陀様を拝めるようにして能を舞ったことは、能の本来の精神を表すものでした。

▲能の夕べで舞う和久荘太郎さん

千灯供養

千灯供養では、足利灯り物語の一環として境内を300本のローソクでライトアップしました。4時から市の職員3人とローソクを配置し、千灯供養の始まる6時前には点火しました。

千灯供養には、檀家の方々だけでなく一般の市民の方々も多く参加しました。また足利灯り物語に参加して、LEDの入った提灯を手にした親子連れのなかにも境内を照らすローソクの美しさに魅せられ、千灯供養に加わった方もいました。

今年の千灯供養では、中央に蓮ローソクを置き、参加した人達が並んで作る輪を内側から明るくしました。

一切精霊祭壇の前で住職が行う読経を聞きながら、輪を作った人達は手から手にローソクを渡し、最後に受け取った人が祭壇に登った人にローソクを渡します。今年は参加者が多いため、ひときわ大きな輪を作り、南無阿弥陀仏をお称えしながらローソクを回しました。

▲中央に配置された蓮ローソクを囲むように輪を作り、ローソクを回して祭壇に立てました

一切精霊祭壇の上から順にローソクが灯され、祭壇が次第に明るくなります。祭壇全部にローソクが灯されると、夜空に祭壇が浮かび上がり幻想的な風景になりました。

百万遍修行

千灯供養の後、本堂に上がり百万遍修行を行いました。手にLEDの入った提灯を持った親子連れや、和服姿の婦人も本堂に集まったので、例年以上に賑やかになりました。

参加者が多いため、大きな数珠を向かい合って手にすることになりました。それでも人数が多く、全員が数珠を持つことができないので、周囲に用意したイスに座ったり、立ったりしました。和泉市長さんも初めて参加されました。

住職の読経に続き、参加者は南無阿弥陀仏をお唱えしながら数珠を半時計回りに回しました。無縁となった方々、災害で亡くなられた方々、戦争で亡くなられた方々、そして参加された方々の先祖の慰霊のため、合わせて4回数珠を回して百万遍修行は盛会のうちに終わりました。

▲百万遍修行では多くの方々が輪を作り大きな数珠を回しました

璽書道場を受けました

今から40年前に僧侶になるための修行である加行（けぎょう）を総本山の知恩院で受けました。そしてこの度10月24日から31日まで大本山の増上寺で璽書（じしょ）道場に入行してきました。璽書とは、浄土宗を深く理解するための道場です。加行と璽書が浄土宗の基本的な修行になります。

毎日、朝の6時から夜の8時まで勤行をするとともに教誡（きょうかい）を受けました。教誡とは、浄土宗の教義を学ぶ授業のことであり、これまで以上に深く教義について学ぶことができました。参加者36名のうち66歳の私が最高齢者であり、毎日14時間の修行は体力的にかなり厳しく感じられました。

最終日の10月31日、増上寺の大殿の扉をすべて閉めて、法主の八木季生猊下から一人一人璽書が授けられました。璽書を受けると阿号が与えられます。阿号とは、浄土宗における高弟を表します。私は今後さらに研鑽を積むという意味で研阿（けんあ）を授けられました。

▲今後は覚誉研阿を名乗ることになります

板倉俊之さんの本

インパルスと言う二人組のお笑い芸人がいます。時々テレビにも出演するので、ご存知の方も多いと思います。インパルスのうちの一人が板倉俊之さんで、檀家のお孫さんです。板倉さんは多才で、お笑い芸人としてだけでなく作家としても活躍しています。この度、お父さんの板倉健二さんを通して二冊の著書をいただきました。

一冊は「月の炎」で、連続放火事件を中学生が解明しようとするうちに驚くべき事実が明らかになるというストーリーです。ミステリーを交えた青春小説であり、とても感動させられました。もう一冊は「蟻地獄」で、裏カジノでの借金を取り返さないと相棒が殺されるという極限状況を描くエンターテインメントで、ハラハラドキドキさせられます。

板倉俊之さんの相方が不祥事を起こし、インパルスは一時休止していましたが、また活動を再開しました。お笑いの世界でも小説家としても板倉俊之さんに活躍してほしいと思います。

▲板倉俊之さんの本

野点を楽しみました

11月11日の日曜日、午後2時から境内で野点を行いました。幸い天候にも恵まれ、秋晴れのもと集まった100人以上の方々が抹茶と干菓子を楽しみました。

織物の街足利らしさを演出したいと思い、庫裡において無料で着付けを行いました。そのため着物姿の女性も多く、庭のあちらこちらで写真を撮っていました。最近は着物を着る方も少なく、また着物を着て出かける場所も少ないようです。今後は当山の野点を、着物を着て参加できる行事にしたいと思います。

境内には野点用の傘が立てられ、イスには緋毛氈が敷かれ、そこに着物姿の女性がいるので華やいだ雰囲気になりました。古都足利らしい、歴史と文化を感じさせる行事になったと思います。

▲境内で行われた華やかな野点

▲野点用の傘により、雅な趣になります

野点を行うにあたり、足利商工会議所の茶の湯愛好会の方々に協力していただきました。またイスと緋毛氈は、織姫神社からお借りしました。関係した方々にあらためて感謝したいと思います。

お琴の演奏会

野点に続き、3時前から恵夢の会によるお琴の演奏会を本堂で開催しました。本堂に上がる階段にも緋毛氈を敷きました。お琴の演奏会でも着物姿の女性たちがいるので、本堂も普段と異なり華やかな感じになりました。

恵夢の会では3張（はり）の琴と篠笛を使い、日本の歌曲や民謡それにジブリの曲などを演奏しました。途中、琴の演奏に合わせて参加者が歌うなど、演奏会は大いに盛り上がりました。恵夢の会には5年前、千灯供養の後で演奏していただきました。今回は昼間で、しかも着物姿の観客も多いため、雅な演奏会になりました。

▲本堂で行われた恵夢の会によるお琴の演奏会